

グローバルな政治における政治思想の位置と機能： オートポイエーティック・システム理論分析の適用可能性に関する考察

川 村 仁 子

はじめに

第1章 方法論としてのオートポイエーティック・システム理論

第1節 機能-構造システムへの転換

第2節 オートポイエーティック・システム理論の特徴

第2章 社会システムの捉え方

第1節 システムとしての社会とコミュニケーション

第2節 社会システムの分化

第3章 オートポイエーティック・システム理論分析の適用可能性

第1節 政治思想に関わる機能分化システム

第2節 政治における政治思想の位置と機能

第3節 グローバルな政治のオートポイエーティック・システム理論分析

おわりに

はじめに

Prof.ニクラス・ルーマン (N. Luhmann以下敬称略) の『社会システム理論』は、「社会学はある種の理論の危機に陥っている」という言葉から始まる¹⁾。彼はその序文において、社会学における経験研究の重要性を踏まえた上でそれを越えた統一的な理論構築の必要性を説いた。このことは国際政治学にも言えることである。国際政治学も社会学と同様に経験的な科学として成果をあげてきた側面が強い学問であり、現実の政治という経験の研究を脇に追いやることはできない。しかしそれゆえに、国際政治学では特定の研究領域を考察対象として発展した理論研究と複数の方法論が存在しており、理論的・方法論的分裂下にあると言われている²⁾。それらの分裂・対立を越えた、対話のための統合的研究が必要とされているのである。また、現在ではグローバリゼーションが進展したことで³⁾、国際社会の行為主体を国家のみに限定す

ることができなくなり、今までの国際社会を含むグローバルな社会が形成されている。もちろん、グローバルな社会において行為主体が多様化しているといえども、国家の存在そのものが脅かされることにはならないだろう。しかしながら、国家の役割それ自体は変容せざるを得ない状況にある⁴⁾。国家以外の行為主体の担う役割が増大することで、これらの行為主体間のネットワークによる国家を越えたグローバルなガバナンスの重要性が認識されているのである⁵⁾。

本稿では、オートポイエティック・システム（以下ApS）理論分析により、グローバルな政治における政治思想（学問としての政治理論）の位置と機能を明確にするための理論枠組みを形成することの足掛かりとして、グローバルな政治システムを政治一般に解消して論じつつ、政治における政治思想の位置と機能を明確にする。グローバルな政治システムを政治システムの下部システムであると捉え、システムと環境の関係を政治システムとその環境として分析する。加えて、グローバルな政治に特有の理論分析に関する展望を示す。政治という実践における学術的理論の機能を明確にすることで「理論と実践」の二項対立を解消し、理論と実践のより複雑なレベルでの政治行為の観察を可能にすることを目指す。また、ApS理論を用いることにより、国際政治学において模索されている幅広い領域に適用可能な理論的・方法論的な統合的研究のための一考察となることを目的とする⁶⁾。

本稿の対象は、政治における政治思想の機能とグローバルな政治のシステム理論分析である。社会をコミュニケーションからなる一つのシステムとして捉え、マクロなレベルから政治思想が政治においてどのように機能しているのかを観察する。観察の方法論としてはApS理論を用いる⁷⁾。社会科学に適用されてきたシステム理論についての説明を加えつつ、ルーマン、Prof. トイブナー（G. Teubner以下敬称略）の理論を基に政治思想の機能分析に適したApS理論を組み立て、それを用いて社会システムにおける政治システム、学術システム、イデオロギー・システムを分析することで、政治思想と政治の関係を分析する理論枠組みを形成する。また、グローバルな政治を政治システムの下部システムとして捉え、政治システム一般には解消されえないその特徴をApS理論によって分析する。これらは分析のための理念系モデルであり、ApS理論を判断枠組みとしたグローバルな政治の経験の検証は今後の課題としたい。グローバル政治における政治思想の位置と機能の詳細な分析も今後の研究によって明らかにしていきたい。

用語の混乱を避けるために現実の政治において統治理論として利用されるものを政治理論（political theory）、学術としての政治すなわち政治学における政治に関する理論を政治思想（political thought）、政治的イデオロギーとしての思想を政治イデオロギー（political ideology）と呼ぶ。また、国際政治学とは狭義の意味での国家間関係による政治（Inter-state Politics）を研究する科学を意味するのではなく、広義の意味での国家という枠を超えたグローバルな政治に関する科学をも含む。グローバルな社会とは、今までの国家を中心とした国際

グローバルな政治における政治思想の位置と機能：オートポイエーティック・システム理論分析の適用可能性に関する考察（川村）

社会に加え、非国家的な民間アクター（企業、NGOといった私的な国際組織及び個人）が行為主体となる社会を指す。社会システムはその境界という意味ではグローバルな社会と同じであり、「世界」とはその外に境界のない全ての空間を指す。

第1章 方法論としてのオートポイエーティック・システム理論

第1節 機能－構造システムへの転換

社会システム理論は1950年代から1960年代にかけて社会学の分野で注目された理論であり、Prof.パーソンズ（T. Parsons以下敬称略）の二者間の相互行為に関する主意主義的行為理論⁸⁾がその代表的なものとして挙げられる⁹⁾。パーソンズは彼の社会システム理論をもって、個人の行為から社会までを分析する理論を提供しようとした。社会科学においてミクロとマクロ双方に適用できる統一理論を提示しようとしたのである。パーソンズの理論の基礎は、社会における個人の行為は社会システムから説明できるというものである。社会システムの構造が個人の行為に一定の共通性を組織し、そのシステムにおける行為者の行為を制限する。行為者のどのような行為がシステム内部の構造を維持し、機能としてシステムの外部にどのような働きとして現れるかを分析する構造－機能的システム理論を説いた¹⁰⁾。ルーマン、はこのパーソンズのシステム理論の機能概念を構造概念に優先させる。多様に機能分化した近代以降の社会では、システムの構造が常にシステム内の行為者¹¹⁾に対して統一的な秩序を与えるとはいえない¹²⁾。ルーマンが説くのは、多数の行為者の作動（operation）そのものがシステムの構造を形成するという機能－構造的システム理論である。社会的行為が他の社会的行為と連関し一つの機能が生じることによって、そのシステムの構造が形成されていく。機能的な作動によって構造が形成されるのである。そうすることで、システムは環境から区別される。このような機能－構造システム理論を説くルーマンが、その社会システム理論に適用したのがApS理論である。

ApS理論は、もともと生物学の分野でProf.マトゥラーナ（H.R.Maturana）とProf.ヴァレラ（F.J.Varela）によって説かれた生命体の自己産出システムの理論である¹³⁾。生命体は、細胞を構成要素とする複数のシステムがオートポイエーシスを形成することにより存在する。オートポイエーシスとは、システムをシステムとして存在させる構成要素をシステム内のネットワークを通じて再生産し、それにより自己保存する状態を言う。ルーマンは社会を、コミュニケーションを構成要素とする複数のシステムがオートポイエーシスを形成している一つのシステムであると捉えることで、自己再生産的・自己保存的な作動からなるApS理論を社会科学に適用した。そしてパーソンズと同様に、社会学が対象とする領域の統一的な方法論としての社会システム理論の完成を目指したのである¹⁴⁾。社会科学におけるApS理論は、法社会学の分野に

において更なる発展を見せる。トイブナーは法社会学の分野において、ルーマンのApS理論を直接継承するのではなく、批判的に発展させることによって、自らのApS理論を論じる。トイブナーはApS理論をさらに細分化し、ルーマンが論じなかったApSの形成過程を段階的に分析する。また、ルーマンが、システムは環境に対して完全に閉鎖しており、環境との関係はカップリングによってのみ説明できるとするのに対し、トイブナーは閉鎖的なシステムの開放性に着目し、環境とシステムの間をハイパー・サイクル理論によって説明する。トイブナーの研究によって、システムが自らの構成要素を自己再生産し、且つそのシステム内において閉鎖的で自己産出的なサブ・システム同士が円環のハイパー・サイクルを形成し、その状態が一つの閉鎖的・自己保存的システムを形成しているというハイパー・サイクル型のApS理論へと発展していく¹⁵⁾。

第2節 オートポイエティック・システム理論の特徴

ここでは、ルーマン、トイブナーのApS理論を基にグローバルな政治分析に適した方法論としてのApS理論を組み立て、その特徴について論じる¹⁶⁾。

①システムと環境の区別

ある行為者がどのような作動をとるかということ、他の行為者は直接的に知ることができない。これは自明のことである。Aという作動を行なった行為者は、Aという作動の変わりにBという作動をとったかもしれない。このように、社会における作動には、偶発性がつきまとう¹⁷⁾。この偶発性の総体が「世界」である¹⁸⁾。それゆえ、世界は複雑である。システム概念の本質はこの複雑な世界において、システムとその環境とを区別することにある。環境は常にシステムよりも複雑であり、その複雑性の縮減がシステムの機能となる。

システムと環境の差異化を可能にする観念を「コード」と呼ぶ。コードは複数の作動を二元的に差異化させ、システムそのものの境界を設定する。システムはコードによってその内と外に分けられる。システムと環境を区別することによって、一つのシステムの存在が認められる。このコードは常に二元的である。システムの内に入るか、そうでないか。例えば、政治システムのコードは「統治／非統治」、法システムは「合法／不法」、学術システムは「真／非真」になる。このコードはシステムと環境を区別するものである。このコードによって環境とシステムを区別することを「観察」と呼ぶ。システムが存在する限りコードは固定的であり、コードの変化はシステムそのものの変化を意味する。何がシステム内に入り何がシステムの外になるのかは「プログラム」によって導かれる。プログラムは、コードによって区別される内容を決定する。何をもって統治／非統治、合法／不法、真／非真とするのかを決定するのである¹⁹⁾。例えば、政治システムにおける政治原則、法システムにおける法規範、学術システムにおける

理論がプログラムに当たる。プログラムはコードとは異なり可変的であって、それ故コードが同じでもプログラムが変化するとシステムの内容が変化することになる。プログラムの変化は、システムが環境に対して自己保存を試みるため、あるいは環境との関係において必要とされるために生じる。但し、プログラムの変化によってシステムそのものが変化することはない。

②システムの閉鎖性と自己産出

二つ目の特徴は、環境に対する作動上の閉鎖性である。システムは一つの統一体ではなく、環境との差異である。システムは自己の作動によって、そのシステムの境界を引く。すなわち、システムは自己の作動によって自己を生み出す²⁰⁾。それゆえ、環境からの直接的な入力も出力もない閉鎖的な性質をもつ²¹⁾。閉鎖的なシステムはその内部においてのみ作動し、その作動自体がシステムを環境と区別する。ここで重要なのが、システムの閉鎖性において因果的閉鎖性と意味における開放性を区別することである²²⁾。環境からの直接的な入力も出力もないということは、システムが環境と直接因果関係を持たないことをいう。環境で何かが生じたとしても、この出来事はシステムに直接的な影響を及ぼさない。しかし、これは因果的に閉じているということであって、意味においては環境と関係することができる。意味とはシステムが環境の情報を選択し、加工する基準であって、その観点においてシステムは環境の刺激に反応することが可能となる。

③自己産出とハイパー・サイクル

システムが閉鎖的であるだけではApSであるとは言えない。閉鎖的であり、且つシステムがその構成要素全体を自己産出し、自己産出の円環により自己保存する場合のみ、そのシステムはApSであると言える。ApSの条件の一つとなる自己産出とは、システムの構成要素と次の作動に必要なエネルギーをシステムの「下部構造」が組織し、システムの「上部構造」との選択的な結合によって新たな統一を構成し自己自身を再産出することである²³⁾。さらにこの自己再産出は次の自己再産出へと繋がり、自己産出による円環を形成することによってシステムは自らを維持する。自らのシステム内に自己産出の秩序を形成することにより、システムの自己産出の循環が生じるのである。それにより、システムは自己保存される。一方で、開放的なシステムの性格において、他のシステムが産出した要素を自己のシステムに参照し、また、自己のシステムが産出した要素が他のシステムによって参照されることにより、一つのより高次のシステムを形成するハイパー・サイクルシステムが生じる。あるシステムがApSであるためには、この自己再産出のハイパー・サイクルによる自己保存の状態が求められる²⁴⁾。

システムが自己産出し、自己保存する過程を詳しく分析すると、自己組織、自己操縦、自己観察、自己記述、自己反省に分けられる。システムがシステム内の作動によって自らの構成要

素を自己産出し、システムの構造を自ら組み立てる能力を有していることを、システムの自己組織化という。そして、システムが自己組織化によって安定を維持することに加え、独自のプログラムをも変更することが可能なとき、システムは自己操縦能力を有する²⁵⁾。また、システムが自ら産出した諸要素によって自らの作動を再構成することを自己観察と言う²⁶⁾。自己観察には差異が必要である。本来あるべきとされる姿と現実とのギャップが必要とされる²⁷⁾。この自己観察がある程度継続しシステムの秩序形成に用いられるとき、システムは自己記述の能力を有する。この自己観察と自己記述は、一つのシステムの中にサブ・システムが形成される契機となり、サブ・システムはシステム内においてハイパー・サイクルを形成する（セカンド・オーダーのApS）。そして、自己操縦と自己記述が互いに組み合わさったとき、システムは自己反省を行なう²⁸⁾。

以上のように、システムが閉鎖的であってその構成要素を自己再生産し、自己産出的なハイパー・サイクルを形成しながら自己組織し、自らの作動を自ら操縦しながら自己記述する場合、そのシステムはApSであると言うことができる²⁹⁾。

④システムと環境の関係

ApSは閉鎖的なシステムである。環境からの直接的な入力も出力もない。では、ApSと環境は全く関係を持たないかと言うと、そうではない。システムと環境は、外部観察、共鳴(resonance)、カップリング、作用(performance)、という方法で関わりあう。

外部観察とは、システムが環境で起こったことを観察することである。システムはその閉鎖性から環境と直接関係を持つことはできない。しかし、システムは環境を外部から観察することができる。システムは環境で起こった出来事を、まず、自己のシステムのコードにあわせてシステム内のコミュニケーションに入れるか入れないかをプログラムから判断する³⁰⁾。システム内のコミュニケーションとして取り込まれた出来事は、そのシステムによってコミュニケーションされる。システムは、システム内で環境についてコミュニケーションすること、すなわち外部観察した出来事を内部に参照することによってのみ、環境を自己の内部に取り込むことができる。このように、システムが外部観察を通じて環境の要素に刺激されることを共鳴という³¹⁾。

次にカップリングとは、閉鎖的なシステム間の相互依存関係である。相互依存関係といっても、お互いに閉鎖的なシステムであるがゆえに、一方のシステムの作動が他のシステムに直接的に影響を与えるわけではない。カップリングは作動上のカップリングと、構造的カップリングに分けられる。作動上のカップリングとは、あるシステムのシステム独自の作動が、他のシステムでは別の作動となることを言う。例えば、選挙での投票という行為は、政治システムにとっては決定への参加という作動になる。しかし同時に、法システムにおいては投票権という権利の行使という作動になる。このように、一つの作動が複数のシステムにおいて同時にシス

グローバルな政治における政治思想の位置と機能：オートポイエティック・システム理論分析の適用可能性に関する考察（川村）

テムの作動となる場合、これを作動上のカップリングと呼ぶ。構造上のカップリングとは、あるシステムがその構造の一部を継続的に他のシステム（そのシステムにとっては環境）に依存する状態を言う。例えば、憲法は政治システムにとっては統治権力の制限、あるいは統治の道具として理解される。しかし、法システムにとって憲法は最高法規として機能する。このように、カップリングは、直接的な入力と出力ではなく、閉鎖的なシステムがその自己保存のため、きわめて選択的に環境と相互依存関係をもつ状態を言う³²⁾。

外部観察、共鳴、カップリングは閉鎖的なシステムと環境の関係を示す概念であった。次に説明する「作用」は、あるシステムがセカンド・オーダーのApSを形成し、さらにそのシステム自体がファースト・オーダーのApSのサブ・システムであるある場合、ファースト・オーダーのApSから観察することによって認識されるものである。システムの「機能（function）」は、ファースト・オーダーのシステムとそのサブ・システムとの関係によって規定されるものであるのに対し、「作用」はサブ・システム同士の関係において規定される³³⁾。これは機能分化システム同士が、ファースト・オーダーのApSのサブ・システムとして従属していることによって、構造的に適合できる場合のみ生じる³⁴⁾。例えば、社会システムのサブ・システムである政治システムは、「拘束的な決定」を行なうことをその「機能」とする。「機能」は政治システムと社会システム全体との関係において規定される。そして、その政治システムの「機能」は、社会システムの他のサブ・システム（法・経済システム等）がそのシステム内において拘束的な決定を必要とする場合、他のシステムと共鳴する。それをファースト・オーダーの社会システム全体から観察すると、政治システムが他のサブ・システムに「作用」していると言うことができる³⁵⁾。

第2章 社会システムの捉え方

第1節 システムとしての社会とコミュニケーション

このApS理論は、どのように社会の分析に利用することができるのだろうか。ここでは先ず、社会を一つのシステムとして捉えることについて考察する。

社会（society）はラテン語の*societas*（共同、団体、組合、結社）を語源とする。これは自然状態とは異なる人為的な人々の結合体を意味する。では、何が社会を成り立たせ、何が社会秩序を形成しているのだろうか。「人間が何を掴み、何を操作するにしても、一人だけでは充分でない。社会が常に誠実な人間の最高の要求である。有為な人間はすべて相互に関連をもたねばならない」³⁶⁾。『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』において、ゲーテ（J.W.Goethe）は社会と人間の関係について説いた。その同時代に、実証哲学の唯一の本質的目的地は社会学であると説いたコント（A. Comte）は³⁷⁾、社会の秩序維持において家族や国家といった個人の結

合体がいかなる機能を果たしているかについて研究するうえで、社会をその構成要素である個人の相互連関によるシステムとして捉えた³⁸⁾。コント以降の社会学の伝統は、社会を個々人の行為に還元し、個人同士を結びつけるものは何か、社会の要素である行為主体にとってそれらがどのような意味を持つのかを考察しなければならないとするヴェーバー (M. Weber) の理論³⁹⁾ と、社会には個人の行為とその動機に還元されないような固有の実態があり、社会的諸事実を対象とした研究が必要であるとするデュルケム (É. Durkheim) の理論⁴⁰⁾ によって二分された。そのなかでパーソンズは、行為者である個人と環境の関係に注目する。環境として特に重要なのが他者の存在であり、行為者は他者の存在すなわち他者の行為や目的を考慮に入れた行為をとる必要がある。このような社会的相互行為は、規範や価値とともに行為者の行為を規制し、相互の行為を予測可能とすることで社会の秩序を形成する。そしてパーソンズは社会的相互行為が体系的性質を持つゆえに、社会もシステムとして捉えることができると考えた⁴¹⁾。パーソンズ以降、社会システムは相互行為の関係として理解されるようになる。

ルーマンはパーソンズの相互行為をさらに分解し、相互行為を成り立たせているコミュニケーションこそが社会の要素であると考え、社会を体系的なコミュニケーションから成るシステムとして捉える。ここで言うコミュニケーションとは、単なる会話や伝達行為を意味するのではない。コミュニケーションとは、情報、伝達手段、理解の三層の異なる選択過程を互いに結合したものである⁴²⁾。社会システムにおいてコミュニケーションは、継続的に次のコミュニケーションと接続することによって再生産される。社会システムは閉鎖的、自己組織的、自己保存的コミュニケーションの作動によるシステム、即ちApSであると考えることができる。このコミュニケーションについて重要なことは、コミュニケーションの主体は人間ではなくコミュニケーションだということである。もちろん人間自体は、社会的コミュニケーションにとって不可欠である。しかし、個人の心的システムの意識それ自体は、「社会的事実」ではない⁴³⁾。意識システム自体は思考の再生産によってなるプロセスであり、社会システムの要素としてのコミュニケーションではないのである⁴⁴⁾。それゆえ、意識システムはコミュニケーションに対して共鳴するに過ぎないのである⁴⁵⁾。但し、伝達行為としては個々の「人格」に帰属する⁴⁶⁾。社会システム理論においては、個人は多層的な人格の総称として捉えられる。例えば、教育システムにおいては学生という人格であると同時に、経済システムでは消費者という人格であり、政治システムではある政党の支持者というように、個人は多層的な人格からなる。ある個人の行為はその個人の「所属」から生じる人格によるものと認識されるのである⁴⁷⁾。

第2節 社会システムの分化

社会システムは情報の内容、伝達手段、それらの理解、という三層の偶発性を伴うコミュニケーションから成る。それ故、社会システムは複雑であり、複雑であるがゆえに分化する。シ

システム分化とはシステムがその内部にシステムと環境との差異を生み出すことによって生じる。それによって、システム内部にサブ・システムが形成される。一時的な社会システムの分化の形態としては、歴史的に見て環節的分化、成層的分化、機能的分化の3つの段階がある。環節的分化とは、社会システムが種族、家族、部落のような同等のサブ・システムへと分化する段階を言う⁴⁸⁾。封建社会が形成される以前の社会の状態が、この環節的に分化した社会システムに当たる。次に成層的分化とは、社会システムが同等ではない階層からなるサブ・システムへと分化する段階を言う⁴⁹⁾。これは貴族中心の封建社会の状態であり、個人は多層的な人格ではなく、階層のなかの固定的な人格として社会に存在する。封建社会の崩壊により、社会システムは次の分化形態へと移行する⁵⁰⁾。それが機能的分化の段階である⁵¹⁾。

機能的分化とは、社会システムがシステムに対する機能によってサブ・システム（例えば政治システム、法システム）を形成する段階を言う。機能的分化は、サブ・システム間に優越的で中心的なサブ・システムが存在しない、多中心型の社会システムを形成する。また、サブ・システムは他の機能分化したサブ・システムに対して独立した閉鎖性を有する⁵²⁾。あるサブ・システムにとって他のサブ・システムは環境にすぎない。これらのサブ・システムは共通の視座をもつことはない。しかし、この機能的に分化した社会システムにおいては、個々のサブ・システムの作動そのものが社会の統一性を形成する。ここで重要なのが差異の中の統一というパラドクスである。各サブ・システムは社会システムとしての統一性を見ることはできない。各サブ・システムは社会システムの全体を観察するが、それは自らのコードに従った区別による観察によってのみ行なわれる。それゆえ、社会には常に複数の観察が存在している。観察そのものが偶発的なものであって、社会は如何様にも観察されうるのである。このような差異が社会の統一性を保つのである。この統一性を見ることができるのは観察を観察する立場である第二次的観察によるしかない。第二次的観察からは、機能分化したサブ・システムはファースト・オーダーのApSとしての社会システムを構成することが観察できる。機能分化した閉鎖的なサブ・システムが、全体社会としての社会システムのハイパー・サイクルの中に、自己の構成要素を結びつけるのである。このファースト・オーダーのApSに対して、サブ・システム内はセカンド・オーダーのApSを形成する。そうすることで、個々のサブ・システムは特定の繋がりによる期待の安定化を求めて、構造的に自己の作動を制限する⁵³⁾。このように、機能分化した社会システムは個々のサブ・システムの作動によって偶発性の縮減を行う⁵⁴⁾。そして、偶発性の総体である「世界」はシステムと環境の差異の統一の概念であり、一切の差異を超越する。

第3章 オートポイエティック・システム理論分析の適用可能性

第1節 政治思想に関わる機能分化システム

理論と実践の二項対立というテーマは、古典古来より自然科学・社会科学双方の分野で定立されてきた課題である。政治学の分野においても、実践としての政治に対する科学的助言の可能性の探求が行なわれてきた⁵⁵⁾。実践としての政治システムにおける政治思想の機能をApS理論により分析することは、理論と実践の二項対立というテーマに対する新たな挑戦である。ApS理論分析では、政治思想が社会システムのどの位置にあるのか、またその機能は何かということをはっきりとできる。政治思想の機能を明確にすることによって政治分野における理論と実践の二項対立を解消し、より高次での政治行為の観察に寄与することができるのである。ここでは先ず、政治思想に関わる3つの機能分化システムについて概説する。

①政治システム

政治システムのコードは統治／非統治である。成層分化社会においては、政治は社会の中心的機能を担うものとして考えられていた。社会秩序の維持をはじめ、あらゆる問題の解決が政治に期待された。しかし、機能分化社会においては、政治は他の機能システムと同様に、社会システムにおける機能分化システムの一つとして捉えられる⁵⁶⁾。政治システムは自ら統治／非統治のコードによって自己の可能性を条件付け⁵⁷⁾、自らのコードに従い自らを環境と区別することによって閉鎖的になる。統治／非統治を決定するプログラムは、政治原則や政策である。政治システムのプログラムは「AのためにBをする」というような目的規範である⁵⁸⁾。政治システムは自らが決定するプログラムに従って、環境の事柄をシステム内に取り込むか取り込まないかを判断する。社会システムにおける政治システムの機能は集団を拘束する決定であり、政治システムはこの決定を自ら産出することによって自己産出の円環を形成する。そして、集団を拘束する決定に対する妥当性がシステムの安定を維持する固有値として捉えられる。近代以降、決定に拘束される者が決定に参加することにより妥当性が与えられる。それゆえ、システムのコードである「統治」とは国家による公権力の行使を伴う決定のみを意味しない。国家の権力分立と民主化により、政治システムは意思決定（Politics）システム、行政（Administration）システム、公衆（People）システムに分化した⁵⁹⁾。これらのサブ・システムは互いを環境とみなしつつ、高度に「作用」し合うハイパー・サイクルを形成している⁶⁰⁾。

機能分化社会においては、政治もまた自らのシステムの外で作動することはできない。もちろん、政治システムには共鳴能力があり、ファースト・オーダーのApSである社会システムからは、政治システムが集団を拘束する決定を必要とする他の機能システムに「作用」することが観察できる。しかし、それは政治システムが環境に直接的に接続できることを意味しない。

政治システムは環境の提供する事柄、あるいは政治の可能性について過大評価する環境の要求に対し敏感に共鳴する。他の機能システムが政治システムに対して過大な要求を行なうのは、他の機能システム内部で集団を拘束する決定に対する要求が構造的に起こってくるからである。政治システムは、それらの要求を自己のシステムが実現可能なものと不可能なものに区別しなければならない⁶¹⁾。しかしながら、政治システムのサブ・システムは、自己の能力以上のことが可能であるというコミュニケーションを始める。このような方向付けにより、政治システムが社会に対して全責任を負うという幻想を形成するのである⁶²⁾。しかし現実的には、政治の実践は集団を拘束する決定をめぐるコミュニケーションである。それゆえ、政治システムは社会と関わっているが、システムのコードによってしか社会を観察することができず、社会システムそのものをコントロールすることはできない。

②学術システム

学術システムのコードは真／非真である⁶³⁾。真／非真を見出すもの以外は、学術システム内に取り込まれることはない⁶⁴⁾。このコードは新たな学術的認識を得るためのものである⁶⁵⁾。学術システムの考察対象自体には制限がなく、真か非真に関わる事柄だという限界を自らのシステム内でのみ判断することができる。システムの構成要素を自ら産出するのである。何が真で何が真でないかを区別するのは、学術システムのプログラムとしての理論である。真／非真を理論によって判断するため、常にこのコードには暫定的な確実性しか有しない。それゆえ、学術システムの理論と実践は区別されるべきだという考えが浸透する。そのような考えが浸透するほど学術システムは統一化され、反省理論が発展していく⁶⁶⁾。学術システムの内部は専門の分野によって分化し、それぞれの専門分野ごとに学術システムのサブ・システムを形成している。また、学術システムはそのシステム内に自らの反省理論である認識論というサブ・システムを形成することによって、自己反省を促す。また、専門分野の諸システム内も、理論と方法論に分化する。この理論は学術システムを現実の世界に関連づける開放性を示し、他方、方法論はコードの適用を導くものとしてのシステムの閉鎖的特徴を有する⁶⁷⁾。このように、学術システムの閉鎖性と開放性の中で、システムは自らの構成要素を産出し自己反省の理論を形成することによって、自己産出と自己保存の円環を形成する。そして、学術システムは固有値である論証可能性によって自らのシステムの安定を保つ。

社会システムにおける学術システムの「機能」は、現実の分解と再結合である⁶⁸⁾。学術システムは自ら観察を行っている各機能システム（例えば、政治システム、経済システム）を観察する立場にあり⁶⁹⁾、学術システム自身を含めた社会全体の記述を行なうことが求められる⁷⁰⁾。学術システムは他の機能システムに選択意識と技術を提供し、他のシステムはそれを自らのコードに従って利用できるものとできないものへと選別する⁷¹⁾。このとき、技術的に可能でなく

でも、コミュニケーションにおいて選別されうる。これは、「他でもありうること」という選択肢が各機能システムにおいて重要である場合である。

③イデオロギー・システム

ここでは、一つのApSとしてのイデオロギー・システムのみを扱う。イデオロギー・システムのコードは論争的なコミュニケーション／非論争的なコミュニケーションである。イデオロギーは、現実化されるように方向付けられた体系的なコミュニケーションである。それゆえ、その性質上論争的である⁷²⁾。従って、イデオロギー・システムは常に2つ以上のサブ・システムに分化する。これらのサブ・システムは常に二極化する傾向にある。サブ・システムが2つ以上ない場合、もはやそれは論争的でありえず、イデオロギー・システムとして成立しない。論争的な言説／非論争的な言説というコードの内容を決定するのは、システムのプログラムである有効性である。学術システムのコードであった真／非真を、イデオロギー・システムは考慮しない。イデオロギー・システムにとって、対象自体が真実か真実でないかということは全く意味を持たない⁷³⁾。その対象自体の真実性は証明される必要がないのであり、その対象に反駁するものもまた同じである。それゆえ、イデオロギー・システムにおけるコミュニケーションはその有効性に基づき、論争的であることによって閉鎖性を有する。そして、サブ・システム同士は常に論争的であることにより自己の要素を自ら再産出し、自己産出による自己保存の円環が形成される。

イデオロギー・システムはその実効性に固有値を見出す。イデオロギー・システムにおけるコミュニケーションは、実現化されるよう求められるのである。この実効性がイデオロギー・システムに開放性を持たせる。イデオロギー・システムはその論争において、一般的と認定されうる利益を認定する。これが、社会システムにおけるイデオロギー・システムの機能である。他の機能分化システムは環境としてのイデオロギー・システムの機能を、「作用」と共鳴によって自己のシステムに参照する。

第2節 政治における政治思想の位置と機能

次に、社会システムにおける政治思想の位置と機能を分析するための理論枠組みを形成したい。政治思想の位置と機能は共鳴、作用、カップリングから観察することができる。

政治思想は学術システムに位置する。学術システムは、自ら観察を行っている各機能分化システムを外部観察する立場にある。学術システムのサブ・システムである政治学システムは、政治システムの作動を外部観察することにより政治システムの作動の分解と再結合を行なう。政治思想とはこの政治学システムによる政治システムの外部観察に関する科学なのである。一方政治システムは、統治のための理論を自ら形成する。これが政治理論である。政治システム

グローバルな政治における政治思想の位置と機能：オートポイエーティック・システム理論分析の適用可能性に関する考察（川村）

は自らのシステム内において、環境の解釈、プログラムの決定、サブ・システム同士の「作用」、他のシステムとのカップリング、システムの作動の仕方についてそれぞれ選択する。政治理論はこれらの選択に関する理論であり、政治を一定の帰結に導くものである。

政治システムは、環境での事柄をシステム内に入れるか入れないかを自ら決定する際に、何かしらの根拠を必要とする。そうすることによって、自らの限界の決定と能力以上の方向付けを行なうのである。このとき、政治システムの環境である政治思想は、政治システムを外部観察することによって、何が政治システムによって達成可能か、何を考慮しなければならないかを評価することができる⁷⁴⁾。政治システムは政治思想を外部観察して共鳴することによって、自己のシステムの作動の根拠を得ることができるのである。

現代において政治システムの固有値である妥当性は、民主主義によって確保されている。そしてこの民主主義には「選択できること」、すなわち選択肢が複数存在することが不可欠である。政治システムではその作動の方向付けのため「他でもありうる」という他の選択肢が必要とされ、それゆえ政治理論は複数存在することになる⁷⁵⁾。政治理論のオプションを定式化する際にも、政治システムがその外部観察である政治思想を自らのシステムに参照することにより、オプションとしての政治理論に妥当性を与えることができる。政治思想は政治システムに選択意識と技術を提供する。このとき、政治思想の実現が技術的に可能でなくても、コミュニケーションにおいて政治システム内に参照されうる。政治理論はその実践のために説得力を得なければならない、学術システムの真／非真のコード内にある政治思想に補助されることによって、真理性あるいは選択の回避事由の正当性を主張できるのである。

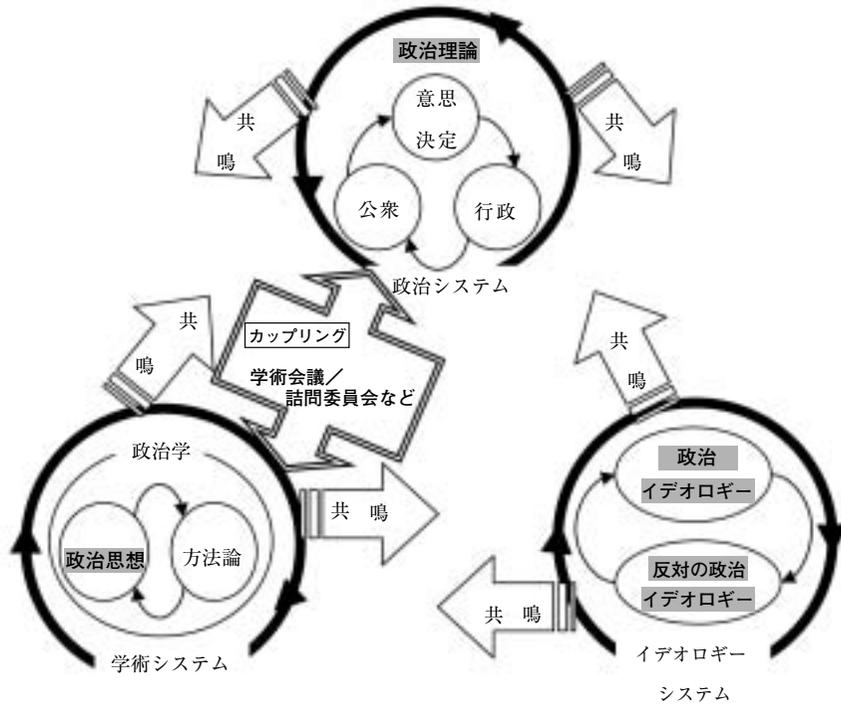
政治思想は政治システムの方向付けの必要性和政治の能力の差異を橋渡する機能を果たすものであり、政治的実践の一つの契機である⁷⁶⁾。政治システムは学術システムと共鳴することで、政治システムの「本来あるべき姿」と現実の差異を認識することができ、自己を観察する能力を獲得する⁷⁷⁾。学術システムによる評価は、政治システムにとって必要不可欠となるのである。このことは、政治システムと学術システムが直接的に接続することを意味しない。それぞれは閉鎖的システムであり、政治思想は学術システムの中で、それも研究過程にしか応用できない。しかし、政治システムが学術システムと共鳴し、学術システムが社会システム内においてその機能を果たし政治システムに「作用」することで、政治システムの自己反省、自己観察の契機となることができるのである。

学術システムにおける政治思想が構造的カップリングとして他の機能分化システムと相互依存する場合としては、学術会議や政府の諮問委員会が挙げられる。また、研究者が政府の委員会、政府間の国際会議、あるいはNGOに参加して政治思想を提供する場合、学術システムにとっては、学術システム内の作動として理解されるが、政治システムにとっては、政治システム内の作動として理解され、学術システムと政治システムの作動的カップリングとして分析で

きる。

政治思想によって提供される選択意識と技術を政治システムに利用できるものときないものに選別する過程において重要な機能を果たすのが、イデオロギー・システムである。政治システムが政治思想と共鳴することも可能である。しかし、政治思想がイデオロギー・システムに政治イデオロギーとして参照され実効性が与えられることにより、政治システムと共鳴しやすくなる。イデオロギー・システムは学術システム、政治システムを外部観察することによって政治思想や政治理論を政治イデオロギーとしてシステム内に参照する。イデオロギー・システムのコードは論争的／非論争的なので、政治思想と共鳴しそれをシステム内に参照することにより、政治思想は政治イデオロギーとして主題化される。イデオロギー・システム内にある政治イデオロギーは、真／非真ということを考慮する必要がない。イデオロギー・システムの性質ゆえに、内部で政治イデオロギー・システムとそれに反対する政治イデオロギー・システムに分化する。そして、イデオロギー・システムの固有値は実効性であるゆえに、政治イデオロギーは現実化されるように求められる。また、イデオロギー・システムは、政治イデオロギーに一般的な利益としての認定を与える。政治システムはこのような性質を持つ政治イデオロギーを外部観察することによって、政治理論に参照する。政治イデオロギーはそれに反する政治イデオロギーと対になるため、政治システム内に参照される時、政治理論とそのオプションを提供することができるのである。

政治システムとの共鳴により、政治思想、政治イデオロギーは政治システム内に参照され政治理論が形成される。学術システムがそれを再び外部観察することによって、再び政治思想が形成される。このように、政治システム、学術システム、イデオロギー・システムは互いに共鳴し合いながら、社会システムにおいてApSを形成する（図参照）。以上のことから、政治における理論と実践の言葉上での対立は難しくなる。政治システムにとって政治理論は自己観察であり、学術システムにおける政治思想は政治システムの自己反省を促す。また、政治システムは政治イデオロギーの実効性を見出し共鳴することで、自己のシステム内で政治思想をより利用しやすくする。そして政治思想は、政治システムの方向付けの際の真理の補助あるいは決定回避の根拠となることができる。理論的分析によって実践を評価し、評価を実践に再帰的に返していく過程が明示されることで、理論と実践のより複雑なレベルでの政治行為の観察が可能となる。



第3節 グローバルな政治のオートポイエーティック・システム理論分析

以上、政治思想、政治理論、政治イデオロギーの関係を論じ、政治における政治思想の位置と機能を明らかにした。最後に、グローバルな政治システム固有の次元におけるApS理論分析の可能性の展望を示したい。現在のグローバルな社会は国家間の関係によって形成されている一方で、政治、経済、法等に機能分化した各分野のグローバルな社会の束として理解することができる。このようなグローバルな社会は中心的役割を担う組織を持たないため、成層的な社会であるとは言えない。そこで、グローバル時代の多中心的社会の分析に適用可能な新たな方法論としてApS理論が有効となる。

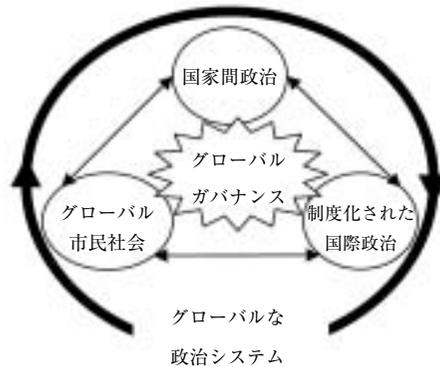
ApS理論では、世界は可能なコミュニケーションの総体として捉えられる⁷⁸⁾。世界におけるコミュニケーションから成るApSとしての社会システムは、その性質上グローバルなシステムである。コミュニケーション自体は国家という枠組みにとらわれることはなく、国内にとどまるコミュニケーションもあれば、国境を越えたコミュニケーションもある。国内とグローバルな社会の違いはそのコミュニケーションの機能の違いとしてのみ区別される。それ故、システムとしてのグローバルな社会とは、機能分化した各分野の国境を越えたコミュニケーション・システムによって形成されるApSであると考えられる。前述したとおり、社会の構成要素であるコミュニケーションは人格に帰属し、個人は多層的な人格の総体として捉えられる。ここで

言う人格には、国家や公的国際機構、グローバルな民間組織といった集合的なものも含まれる。しかし実際には、グローバルな社会におけるコミュニケーションは、それらの代表者あるいは職員という人格に帰属するコミュニケーションによって成り立っている。そして、個人は多層的な人格の総体であるゆえに、複数のコミュニケーションに帰属する⁷⁹⁾。例えば、ある国際機関の事務総長としての人格に帰属するコミュニケーションと、その人物が職務を離れ別のコミュニティに参加する際の人格に帰属するコミュニケーションとは同じではない。グローバルな社会は一つではなく、役割ごとに社会が存在し、個人は複数の社会に重複的に属する。これら無数の社会の総体として「グローバルな社会」が形成されるのである。

コミュニケーションを要素とするApSとして捉えられるグローバルな社会システムから機能分化したグローバルな政治システム (Global Political System) は、政治システムの下部システムである。それは、政治システムのグローバルなコミュニケーションによって形成されるものとして位置付けられる。ゆえに、グローバルな政治システムのコードも、統治／非統治である。しかし、その統治の意味が国内の政治システムとは異なる。国内の政治システムのコードである統治はガヴァメント (Government) を意味し、コードはgovernment／non-governmentになる。一方、グローバルな政治システムのコードである統治はガヴァナンス (Governance) を意味し、コードはgovernance／non-governanceとなる。ガヴァメントは統治と被統治の関係が明確であり、その状態が一定期間固定されるのに対し、ガヴァナンスは統治と被統治の関係は固定的ではなく、同時に同一の主体となることもある。ガヴァメントが中心的な機関による制度化された決定メカニズムを重視する傾向があるのに対し、ガヴァナンスは行為主体相互間の協議とコンセンサスを重視する傾向がある⁸⁰⁾。グローバルな政治においては中心的な決定メカニズムは存在せず、統治と被統治の関係も固定的ではない。それ故、コードである統治はガヴァナンスとして捉えられる。グローバルな政治システムは政治システムの下部システムであるゆえに、プログラム及び固有値は政治システムのもを継承する。

グローバルな政治システムは、3つのサブ・システムに分化している⁸¹⁾。一つは、国家間関係による政治システム (Inter-State System) である。これはウェストファリア条約から続く、国家間政治による統治システムである。ここでは、国家の代表者としての人格に帰属するコミュニケーションによってシステムが形成される。国家同士の独立と平等、他国への内政不干渉といった原則の下、二国間あるいは多国間での場当たりの協定により統治が行われる。

二つ目は、制度化された国際政治システム (International Institutionalized System) である。これは第一次世界大戦以降に国家間政治によるシステムから分化したものであり、ここでは国家だけではなく多国間の協定による国際機構、レジーム、それらに内包される民間アクターのコミュニケーションも含まれる。国家間関係による政治システムが場当たりのであったのに対し、永続的かつ安定的なコミュニケーションからなるシステムである。



三つ目は、国家を越えた社会システム（Transnational Society System）である。これは、民間の非政府組織による国境を越えたコミュニケーション・システムである。ここには中心的な統治機構は存在せず、それぞれのアクターが自らを統治する多中心型のシステムである。グローバル化が進展することにより、国境を越えた社会システムはグローバルな政治システムにおいて重要性を高めている。

グローバルな政治システムを構成する、国家間関係による政治システム、制度化された国際政治システム、国境を越えた社会システムは、政治システムにおける意思決定システム、行政システム、公衆システムに当たる。そして、これら3つのシステムがオートポイエシスを形成するとき、グローバル・ガバナンスすなわち、グローバルな政治システムが生じるのである。

グローバルな政治システムは政治システムの下部システムに位置付けられているゆえに、他の機能分化システムとの関係は政治システムと環境の関係を継承する。グローバルな政治システムも因果的意味では閉鎖的であるが、共鳴やカップリング、二次的観察からは社会システム全体における「機能」や機能分化システム同士の「作用」として、他のシステムと関わる。グローバルな政治における政治思想の位置と機能は、政治システムに対するそれと基本的には同じである。グローバルな政治システムが、学術システムにおける政治思想のグローバルなコミュニケーションと共鳴し、学術システムが社会システムにおいてその「機能」を果たしグローバルな政治システムに「作用」することは、グローバルな政治システムの自己反省、自己観察の契機となる。また政治思想は、イデオロギー・システムにおける政治イデオロギーのグローバルなコミュニケーションと共鳴することによって実効性を与えられ、再びグローバルな政治システムに参照される。そして、グローバルな政治システム内における理論とオプションを提供するのである。このように、実践としてのグローバルな政治システムにおける政治思想の位置と機能を明確にすることによって、実践と理論のより複雑なレベルでの政治行為の観察が可能となる。

おわりに

本稿では、政治思想の機能分析に適したApS理論を組み立て、それをを用いてグローバルな政治における政治思想の機能分析のための理論枠組みを形成した。第1章では方法論としてのApS理論について論じた。ルーマンがパーソンズの構造-機能システム理論を機能-構造システム理論へと転換した経緯について論じるとともに、ルーマンやトイブナーのApS理論を基に政治思想の機能分析に適したApS理論を組み立て、その特徴を説明した。第2章では、ApS理論を社会の分析方法として用いた社会システム理論について検討した。社会の構成要素が個人、相互行為、コミュニケーションと分析されていった過程と、社会がそれらの体系的なシステムとして捉えられてきた経緯を説明するとともに、現在の社会が可能なコミュニケーションの総体としての「世界」における、機能分化したコミュニケーションのApSとして捉えられることを確認した。第3章では政治思想に関わる政治システム、イデオロギー・システム、学術システムを概説し、ApS理論を用いて政治における政治思想の位置と機能を分析する理論枠組みの形成を試みた。また、グローバルな政治システム固有の特徴について分析を加え、グローバルな政治におけるApS理論分析の展望を示した。

グローバルな政治システムと、学術システム、イデオロギー・システムの詳細な分析及び、コミュニケーションの結果としての行為理論の組み立ては今後の課題とする。そして、これらの理念系モデルを判断枠組みとして、現実のグローバルな政治における政治思想としての共和主義の機能を組織的にみることによって、この理論の検証としたい。

注

- 1) ルーマン『社会システム理論』, VIII頁
- 2) 日本国際政治学会の2007年研究大会において、国際政治学における「理論と方法」がテーマの一つとしてとりあげられた。
- 3) グローバリゼーションの定義はHeld/McGrew *Globalism/Anti-Globalization*, 1-2頁参照。
- 4) ヘルド『グローバル社会民主政の展望』2頁
- 5) *Slaughter A New World Oeder*
- 6) 龍澤邦彦教授の「成熟したアナキーな社会の統治形態としてのグローバル・ガバナンス」立命館大学国際関係学部創立20周年記念シンポジウム(2007年3月2日)、及び廣瀬和子教授の助言より着想を得た。
- 7) 国内では土方透教授、河本英夫教授らによってApS理論の研究がなされている。また、小野耕二教授、松永真一教授らによる政治システム論に関する先行研究が存在する。
- 8) 社会に規定されるのではなく、自発的に行為する行為者の意図や動機を基礎とする社会学理論である(『社会学中辞典』, 441頁)。
- 9) Alexander *Theoretical Logic on Sociology*, vol.1

グローバルな政治における政治思想の位置と機能：オートポイエティック・システム理論分析の適用可能性に関する考察（川村）

- 10) 廣瀬和子教授はパーソンズの行動論を再構成することにより、利害、役割、シンボルからなる個人及び国家の行動システム理論を確立した（廣瀬『紛争と法』、『国際法社会学の理論』）。
- 11) 本稿において行為者とは個人だけを指す用語ではなく、何らかの社会的作動が帰属する者、法人あるいはシステムを意味する。
- 12) 以下クニール／ナセヒ『ルーマン 社会システム理論』33-45頁参照。
- 13) マトゥラーナ／ヴァレラ『オートポイエーシス』
- 14) クニール／ナセヒ『ルーマン 社会システム理論』43頁
- 15) トイブナー『オートポイエーシスとしての法』28-47頁
- 16) ルーマンの『社会システム理論』、『システム理論入門』、『社会システム理論の視座』、『ポストヒューマンの人間論』、『エコロジーのコミュニケーション』、トイブナーの『オートポイエーシス・システムとしての法』が主な参考文献である。
- 17) 本稿で扱うApS型の社会システム理論では作動とはコミュニケーションを意味する。行為はコミュニケーションという諸作動の結果である。
- 18) 世界はシステムではなく、システムと環境の総体として捉えられる。世界の外には環境は存在しない（クニール／ナセヒ『ルーマン 社会システム理論』45-46頁）。
- 19) ルーマン『エコロジーのコミュニケーション』85-96頁、271-272頁
- 20) ルーマン『システム理論入門』100頁
- 21) ここで、閉鎖的なシステムにおけるエントロピーの問題が生じる。しかし、閉じられたシステムの作動を因果関係と区別することによってこの問題は解決できる（ルーマン『システム理論入門』102頁）。
- 22) ルーマン『システム理論入門』104頁
- 23) トイブナー『オートポイエーシス・システムとしての法』42頁
- 24) 同上、44頁
- 25) 同上、39頁
- 26) 同上、38頁
- 27) ルーマン『福祉国家における政治理論』137頁
- 28) トイブナー『オートポイエーシス・システムとしての法』38頁
- 29) トイブナーは、自己産出、自己観察、自己組織、自己記述、自己操縦、自己反省の最も一般的な概念として「自己言及」という用語を用いる（同上、36頁）。
- 30) ここで言うコミュニケーションは単なる会話、あるいは意思の伝達を意味しない。コミュニケーションについては第2章の「社会システムの捉え方」で説明する。
- 31) ルーマン『エコロジーのコミュニケーション』37頁
- 32) カップリングに関してはルーマンの『システム理論入門』130-157頁に詳しい説明がある。
- 33) ルーマン『福祉国家における政治理論』、86頁
- 34) 同上、88頁
- 35) 同上、87頁
- 36) 訳はゲーテ『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代（下）』141頁を参考にした。
- 37) コント「実証精神論」
- 38) Coser *Masters of Sociological Thoughty*
- 39) ウェーバー『理解社会学のカテゴリー』

- 40) デュルケム『社会学的方法の基準』
- 41) Parsons *The Structure of Social Action*
- 42) ルーマン『社会システム理論 上』219頁
- 43) ルーマン『エコロジーのコミュニケーション』61頁
- 44) ルーマン『社会システム理論』第2章, 第4章及び第7章を参照。
- 45) ルーマン『エコロジーのコミュニケーション』62頁
- 46) クニール／ナセヒ『ルーマン 社会システム理論』104頁
- 47) 但し, 互いに孤立した人格ではなく, 総体の中のある人格にコミュニケーションが帰属すると考えられる (Burdeau *Traité de Science politique Tome I*, 172-173頁参照)。
- 48) ルーマン『社会システム理論 下』773-774頁
- 49) 同上, 775-776頁
- 50) ルーマン『福祉国家における政治理論』44頁
- 51) ルーマン『社会システム理論 下』777頁
- 52) トイブナー『オートポイエーシスとしての法』48頁
- 53) クニール／ナセヒ『ルーマン 社会システム理論』176-178頁
- 54) ルーマンはこれをハインツ・フォン・フェルスターの「固有价值」の概念を用いて説明する。固有价值は特定の繋がり of 蓋然性を高め, 自己の作動を制限する。固有价值がなくなるとシステムの安定が崩れ, システム自体の崩壊を招く (Ferster *Schit und Einsicht*, 210頁)。
- 55) ルーマン『福祉国家における政治理論』139頁
- 56) ルーマン『エコロジーのコミュニケーション』158-159頁
- 57) ルーマン『福祉国家における政治理論』33頁
- 58) 龍澤「グローバル・ローとトランス・コンスティテューションナリズム」5頁
- 59) ルーマン『福祉国家における政治理論』, 44頁
- 60) 同上, 45頁
- 61) 同上, 133頁
- 62) 同上, 156頁
- 63) ルーマン『エコロジーのコミュニケーション』144頁
- 64) 同上, 146頁
- 65) 同上, 147頁
- 66) 同上, 144頁
- 67) 同上, 148頁
- 68) 同上, 149頁
- 69) 同上, 149頁
- 70) 同上, 150頁
- 71) 同上, 156頁
- 72) Baechler *Q'est-ce que l'idéologie?* 60頁
- 73) ルーマン『エコロジーのコミュニケーション』61頁
- 74) ルーマン『福祉国家における政治理論』, 94頁
- 75) 例えば複数政党制というのは, 政治理論の意思決定システムにおける政治理論のオプションをめぐるコミュニケーションとして捉えることができる。

グローバルな政治における政治思想の位置と機能：オートポイエーティック・システム理論分析の適用可能性に関する考察（川村）

- 76) ルーマン『福祉国家における政治理論』147頁
- 77) 同上, 137頁
- 78) ルーマン『社会システム理論 下』746頁
- 79) セル (G.Scelle) は、この多層的な人格としての個人を国際社会の主体と考えた。セルはデュルケム、デュギイ (L. Duguit) の社会的連帯の理論を基に、国際社会を人間の特性である連帯性と労働分業から導き、国家ではなく個人を単位とした社会として国際社会を見た。これは国内社会も国際社会も個人に還元されるという、一元論の見方である。このセルの理論は、国際政治におけるApS理論の適用可能性を充分に示していると言える (デュルケム『現代社会学体系 社会分業論』, Duguit *L'Etat*, Scelle, *George Le precis du droit des gens*)。
- 80) グローバルな政治システムのコードとしての統治 (ガヴァメント) 及び、ガヴァメントとガヴァナンスの区別は龍澤「グローバル・ローとトランス・コンスティテューショナルリズム」4頁を参照。
- 81) 同上, 6頁を参考にした。

《参考文献》

【外国語文献】

- ・ Ed. by Albert, Mathias, and Hilkermeier, Lena, *Observing international relations : Niklas Luhmann and world politics* (Routledge, 2004)
- ・ Alexander, J.C. *Theoretical Logic on Sociology*, vol.1 (Routledge and Kegan Paul)
- ・ Burdeau, Georges *Traité de Science politique* Tome I - X (L.G.D.J., 1967 - 1986)
- ・ Baechler, Jean *Qu'est-ce que l'idéologie ?* (Gallimard, 1976)
- ・ Coser, Lewis A. *Masters of Sociological Thought : Ideas in historical and social context* (Harcourt College Pub., 1977)
- ・ Duguit, Léon *L'Etat: le droit objectif et la loi positive* (Dalloz, 2003)
- ・ Foerster, Heinz v., *Sicht und Einsicht : Versuche zu einer operativen Erkenntnistheorie* (Braunschweig, 1985)
- ・ Gadamer, H.G., *Wahrheit und Methode* (Mohr Siebeck, 1960)
- ・ Göbel, A., *Die Selbstbeschreibungen des politischen System* (Westdeutscher Verlag, 2003)
- ・ Held, David/McGrew, Anthony *Globalism/Anti-Globalization* (Polity Press, 2002)
- ・ King, Michel/Thornhill, Chris *Niklas Luhmann's theory of Politics and Law* (Palgrave Macmillan, 2005)
- ・ Luhmann, Niklas *Political theory in the welfare state* (W. de Gruyter, 1990)
Ecological Communication (The Univ. of Chicago Press, 1989)
Social system (Calif.: Stanford Univ. Press, 1995)
Globalization or World Society?: How to conceive of modern International Review of Sociology March 1997, Vol.7 Issue 1, p.67
Die Politik der Gesellschaft (Suhrkamp Verlag, 2002)
- ・ Maturana, Humbert/ Varela, Francisco, J., *Autopoiesis and Cognition* (Boston Studies in the Philosophy of Science, 1979)

- ・Parsons, Talcott *The Structure of Social Action* (Blackwell, 1937)
- ・Scelle, George *Le precis du droit des gens* (Sirey, 1932)
- ・Slaughter, Anne-Marie *A New World Oeder* (Princeton Univ. Press, 2004)
- ・Teubner, Gunther *Law as an Autopoietic System* (Oxford: Blackwell, 1993)

【日本語文献】

- ・アバークロンビー, N./ヒル, S./ターナー, B.S.『社会学中辞典 新版』(ミネルヴァ書房, 2005年)
- ・コント, オーギュスト「実証精神論」『世界の名著36』(中央公論社, 1970年)
- ・デュルケム, エミール『現代社会学体系 社会分業論』(青木書店, 1971年)
『社会学的方法の基準』(岩波書店, 1978年)
- ・ゲーテ『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代(上),(中),(下)』(岩波書店, 2002年)
- ・ヘルド, デヴィッド『グローバル社会民主政の展望』(日本経済評論社, 2005年)
- ・クニール, ゲオルク/ナセヒ, アルミン『ルーマン社会システム理論』(新泉社, 1995年)
- ・ルーマン, ニクラス『社会システム理論の視座』(木鐸社, 1985年)
『社会システム理論(上・下)』(恒星社厚生閣, 1993年)
『ポストヒューマンの人間論』(東京大学出版会, 2007年)
『システム理論入門』(新泉社, 2007年)
『福祉国家における政治理論』(勁草書房, 2007年)
『エコロジーのコミュニケーション』(新泉社, 2007年)
- ・マトゥラーナ, H.R./ヴァレラ, F.J.『オートポイエーシス』(国文社, 1991年)
- ・パーソンズ, タルコット『社会的行為の構造』(木鐸社, 1976年)
- ・トイブナー, グンター『オートポイエーシス・システムとしての法』(未来社, 1994年)
- ・ウェーバー, マックス『理解社会学のカテゴリー』(岩波書店, 2002年)
- ・龍澤邦彦「グローバル・ローとトランス・コンスティテューションナリズム」2008年10月25日「憲法学会」
研究報告レジュメ
- ・廣瀬和子『紛争と法』(勁草書房, 1970年)
『国際法社会学の理論』(東京大学出版会, 1998年)

(川村仁子, 立命館大学大学院国際関係研究科博士後期課程)

The position and the function of the Political Thought in the Global Politics:

A prospect in the Applicability of the theoretical concept of Autopoietic System as a methodology to International Politics

The aims of this article are to clear up the position and the function of the political thought in the Global Politics by use of the theoretical concept of Autopoietic System, and to suggest the theoretical concept of Autopoietic System as a new unified methodology for International Politics.

The Autopoietic System which I deal with in this article is a closed system which produces its own components by self-reference. In addition inside the system, there are some closed sub-systems which form into a hyper-cycle. According to the theory, society is analyzed as an Autopoietic System of Communication. The Social System has many sub-systems which have been specialized by their functions.

There are three systems concerning the political thought: the Political System, the Scientific System, and the Ideological System. The political thought is seated in the Scientific System which has been closed by the binary code; truth and falsity. The political thought focuses on the external observation of Political Theories. Political Theories are the theories for government. They are seated in the Political System which has been closed by binary code; governing and not-governing. Political Theories are tools for the self-observation of the Political System. The Political System can observe the political thought from outside and they set off the self-reflection of the Political System. The Ideological System has also observed the political thought. The binary code of the system is argumentative and not-argumentative. The Ideological System has referred to the political thought so as to form Political Ideologies in its system. The Political System has observed Political Ideologies. The availability of Political Ideologies is sought by the external observation and the Political System has referred to them as they are.

By the Autopoietic System analysis, it is possible to have more complex observations of the relationship between Theory and Practice in the Global Politics.

(KAWAMURA, Satoko, Doctoral Program in International Relations,

Graduate School of International Relations, Ritsumeikan University)